

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

「動詞の受動形＋テアル」構文についての一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): ラレテアル文, テアル文, 受身文 キーワード (En): 作成者: 韓, 済蓬 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000078

「動詞の受動形+テアル」構文についての一考察

A Study of the “Intransitive Verb + -raretearu” Construction in Japanese

韓 濟 蓬

キーワード：ラレテアル文 テアル文 受身文

Key Words: -raretearu -tearu passive sentences

要旨

本稿は、日本語の「動詞+ラレテアル」構文（以下、ラレテアル文）について考察した。ラレテアル文は、受身文とテアル文の特徴を兼ね備えており、両者の融合であり、意味的には、テアル文により近いと考えられる。

また、ラレテアル文の意味分類を試みた。テアル文との距離を基準とし、ラレテアル文を存在文（単純存在文と動作主前面化存在文）と準備文という二つのタイプに分けた。

さらに、ラレテアル文と受身文とテアル文との関係を分析した。単純存在文は、ほとんどの場合においてテアル文や受身文と置き換え可能であるが、ラレテアル文は行為主の意志を前面化できる一方、受身文ではできない。また、動作主前面化存在文は、テアル文と異なり、構文上で動作主を提示することができる。一方、準備文では、受身文は「前もって準備」という機能がない。ラレテアル文は他動詞としか共起しないが、テアル文は自動詞と共起し、準備を表すことができる。

Abstract

This paper examines the Japanese “transitive verb -raretearu” sentences, hereinafter referred to as “-raretearu” sentences. It argues that “-raretearu” sentences in Japanese exhibit a combination of characteristics of both passive sentences and “-tearu” sentences, and it is considered that in terms of meaning, it is closer to the “-tearu” sentences.

Furthermore, “-raretearu” sentences, based on semantics, are categorized into existential sentences (It is suggested by this paper that existential sentences can be further divided into simple existential sentences and resultant existential sentences.) and perfect sentences whose relationships with the transitive verb “-tearu” sentences and passive sentences are subsequently analyzed, respectively. In most cases, simple existential sentences can be interchanged with the transitive verb “-tearu” sentences and passive sentences. The differences between them and the “-raretearu” lie in the fact that the latter sentences can highlight the volition of the action subject, which is not possible in passive sentences. Additionally, “raretearu” can appear in the syntactic structure of the action subject, while “-tearu” sentences cannot. Moreover, in perfect

sentences, passive sentences do not serve the same purpose. The distinction between “-raretearu” and “-tearu” is that “-tearu” can be used with intransitive verbs to indicate prior preparation for something, whereas “-raretearu” cannot express preparatory meaning in the same way.

一、問題提起

日本語には「動詞の受動形+テアル」という表現が存在している。以下では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese 以下BCCWJ) から収集した使用例を示す(下線は筆者)。

- (1) a、先日落札したんですが、落札通知に取り引き方法が記載されてあるので、ということでした。(OC14_07807 BCCWJ)
- b、しかしさすが元委員長の I 氏のメニューだけあってよく考えられてあり、参考になる点が多い。(OY05_00143 BCCWJ)
- c、基地は、積みの壁で囲んだ小さな岩室で、床に枯草が敷かれてあった。(PB12_00067 BCCWJ)

こうした「動詞の受動形+テアル」構文について、現代日本語においてはあまり見られず、「他動詞の受動形+テイル」構文(受身文)より抵抗感を伴い、落着きの悪い表現、または誤用表現であるという否定的な意見がある。それに対し、寺村(1984: 152)は、「動詞の受動形+テアル」構文を理屈から共起できない表現と指摘しつつも、「実際には小説などでわりとよく見かける」と述べている。また、野村(1983 [1969])は、こうした表現は明治以降の小説においてはよく使われた表現であるが、今後すぐには減びないと論じている。本稿は、BCCWJ⁽¹⁾を利用し、「動詞の受動形+テアル」構文の使用状態を調査してみると、611件が検出された。その中に、小説のほか、Yahoo知恵袋から抽出された話し言葉に近

(1) 2023年5月アクセス。検索式: キー: (品詞 LIKE “動詞%”) AND 後方共起: (語彙素読み=“レル” OR 語彙素読み=“ラレル”) ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素=“て” ON 2 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素読み=“アル” ON 3 WORDS FROM キー

いとされる語例もあれば、国会会議録のような硬い文書から抽出されたものも多い。その調査の結果から、「動詞の受動形+テアル」構文は、現代日本語においては、小説のみならず、日常会話においても慣用化した表現として定着していることが明らかである。

「動詞の受動形+テアル」構文の意味として、寺村(1984)、益岡(1987)、于康(2006)及び趙福泉(2007)は、「眼前の情景描写」に用いられ、「他動詞+テアル」「他動詞受動形+テイル」「非対格動詞+テイル」構文に置き換えられると提唱している。高倉(2014)はそれらの説を受けた上で、目の前の状態を描写する場合、「動詞の受動形+テアル」構文は、「他動詞の受動形+テイル」構文よりも動作主の存在が強く、そして「能動動詞+テアル」構文に比べ、動作主の意図が強調されない表現であると述べている。以上の先行研究は、「動詞の受動形+テアル」構文の機能を発話者が目の前の情景を如実に描き出すことに限定している。ところが、例(1b)で示されたように、「動詞の受動形+テアル」構文には、視覚で取れない状態を描き出す機能を有することが確認された。その問題に注目した襄(2018)では、「動詞の受動形+テアル」構文には、眼前状態描写以外、「行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見えない形で存続」という機能もあることを提案されている。

また、「動詞の受動形+テアル」構文は、形式的に、動詞の受動形とテアルという二つ部分が合体したものであるため、その構文は、動詞の受動形の後にテアル形式が接続することによって構成されるのか、あるいはテアル文に、動詞の受動形が前接することで成り立つのか、つまり「動詞の受動形+テアル」構文はテアル文に所属するのかあるいは受身文に所属するのかについては、さまざまな議論がある。例を上げると、志波(2012)は、「動詞の受動形+テアル」構文を受動文の一分類として捉えているのに対し、権(2013)は、「動詞の受動形+テアル」構文は「能動動詞+テアル」構文による派生された一形式であると提案している。「動詞の受動形+テアル」構文の位置付けについては、より一層検討する必要があると考えられる。

本稿は、先行研究を踏まえながら、BCCWJおよび『昭和・平成書き言葉コーパス』(以下SHC)を利用し、「動詞の受動形+テアル」構文の語例を収集し、「動詞の受動形+テアル」構文の位置付け、意味分類、さらに「能動動詞+テアル」構文、「他動詞受動形+テイル」構文との関係を研究しようと思っている。

なお、便宜上、本稿は「動詞の受動形+テアル」構文をラレテアル文、「他動詞受動形+テイル」構文をラレテイル文、そして「能動動詞+テアル」構文をテアル文と称す。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第一節は問題提起と先行研究の整理である。それから、第二節はラレテアル文の位置付けを討論するものである。第三節は、ラレテアル文の意味特徴および分類を試みる。第四節は、ラレテアル文と、ラレテイル文とテアル文の相違についての論述である。第五節は、結論と今後の課題である。

二、ラレテアル文の位置付け

ラレテアル文は、構文特徴として、動詞の受動形にテアル形式が接続し、成り立った表現である。そのため、ラレテアル文の位置付けに関しては、受身文に所属するかあるいはテアル文に所属するかは、さまざまな議論がある。

Martin (1975) は、ラレテアル文の位置付けについては明言していないが、ラレテアル文の意味分類として、自動詞が述語となる迷惑受身文(adversative passive from intransitive verb)、他動詞が述語となる迷惑受身文(adversative passive from transitive verb) または一般受身文(pure passive) という三つの類型を提案している。その使用例として、(2)を参考されたい。

- (2) a、私は前にもう上の子に死なれてあるから、今度の不幸ではあまり大きな打撃を受けません。
b、法令により、立ち入りを止められてある。
c、これらの文章は生活に結びついて書かれてあります。

(ibid. : 527)

(2)の例文からみると、Martinは、第一節で述べた「眼前の情景描写」というラレテアル文の機能については一切触れておらず、ラレテアル文の意味を受身表現と捉えられるとは言える。しかし、(2)のラレテアル文は、ラレテイル文(子に死なれている、立ち入りが止められている、文章は生活に結びついて書かれている)に置き換えるとより自然な文になると思われる。尹(1995)は、野村(1983

[1969]) の説を受け、ラレテアル文は成立時間は近代であると想定しながら、近代小説を対象としてラレテアル文の使用状況について調査を行った。尹氏は、ラレテアル文は、明治期に入って欧文脈の影響による非情の受身文が発達しており、その影響を受け、ラレテイルの使用頻度も増加しているが、その時期における「ある」「いる」の乱用によって、ラレテアルの使用も次第に多くなったと述べている。(2) で示された実例は、まさにその混乱期におけるラレテイル乱用の実例であり、現代日本語において正しい表現ではないと考えられる。また、志波(2012) では、日本語の受身文表現について分析を行い、受身文の分類を提案している。その中に、存在型受身文の下位分類として、存在様態型や抽象存在型がある。存在様態型は、外的行為者の働きかけの残存がある場所にあることを表すのに対し、抽象存在型は、抽象的概念ないし現象が別の概念/ことに存在していることを表す。その二つの受身文は、いずれも「場所に対象がV-ラレテアル/ラレテイル」という文型を持っており、ラレテアル文とラレテイル文の置き換えも可能である。

一方で、ラレテアル文はテアル文の一種であるという考え方もある。益岡(1987) では、テアル文の格パターンを根拠とし、テアル文を「が...である」(A型)と「を...である」(B型)に分類している。その中で、A型は、動作の対象語が主語となり、受動構造を持っている。さらに、A型は、「A1型：行為の結果をもたらされる、ある場所で行為の対象の存在を描写するタイプの文」「A2型：行為の結果もたらされる、受動者の状態が目に見える形で存続していることを描写タイプの文」に分けられている。共起できる動詞として、A1型に関与する動詞は、「配置動詞」が中心であり、A2型は「状態変化動詞」との関連性が強い。一方で、B型は、動作主が主語となるという構文特徴を持ち、ある目的のために起こされた行為の結果(B1型)、あるいはその行為の効力は基準時における有効性(B2)を示すテアル文である。さらに、益岡氏は、A1型のテアル文には、ラレテアル文が許容されると述べており、ラレテアル文をA1型表現の一種と考えられる。その考え方は権(2013)と一致している。

それに対し、褓(2018)は、益岡(1987)の説をうけ、ラレテアル文は全て受動構造を取っていることを認めたが、ラレテアル文には、テアル文が持っていない機能を有することを提案し、ラレテアル文を(3)のように分類している。

(3)「Aタイプ」：行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写するタイプの文

「Bタイプ」：行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見える形で存続していることを描写するタイプの文

「Cタイプ」：行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見えない形で存続していることを描写するタイプの文

(裴 2018: 15-16)

裴氏は、「Aタイプ」と「Bタイプ」がそれぞれ益岡(1987)のA1型とA2型に対応する一方で、「Cタイプ」は、A型テアル文に対応するものがなく、動作対象が目に見えない形で持続していることを表す、ラレテアル文特有の機能を持っていると強調している。また、裴氏は「Aタイプ」と「Bタイプ」の分類基準をはっきり説明していないが、「Aタイプ」と「Bタイプ」は肉眼で観察される動作対象の「位置の変化」あるいは「状態の変化」に注目しているのに対し、「Cタイプ」は動作対象の目に見えない状態を重視している。つまり、可視性の有無を基準に、ラレテアル文を二分し、そして可視性のあるラレテアル文を、位置重視か変化重視かで「Aタイプ」と「Bタイプ」に再分類した。しかしながら、問題点としては、そもそもA型テアル文は、目に見えない状態を描写することができる。(4)を参照されたい。

(4) a、[生徒達のリサイタルのあとで]

先生：子供達みんなに、「よくがんばって偉かった」と褒めてやらなければなりません、褒め忘れた子供はありますか。

助手：太郎君と夏子さんはもう褒めてありますが、花子さんがまだ褒めてありません。

b、[弦楽器専門店で]

バイオリンは、弾けば弾くほど音がよくなると聞いたことがあります、どのバイオリンが一番よく弾いてありますか。

(高見・久野2014: 8-9)

(4)で示された例文は、構文上にはいずれも能動構造を持っており、益岡

(1987) が提案したA型テアル文である。また文の意味においては、「褒める」と「弾く」はいずれも対象に目に見える影響を与える動作ではないが、(4a) (4b) はいずれも適格文である。つまり、裴氏が提唱した「Cタイプ」ラレテアル文が持っている機能は、ラレテアル文の特有なものではないことも明らかである。(4) については、高見・久野 (2014) は、テアル文の適格性は、単に動詞の意味のみに依存するわけではならず、文脈による判断することが必要であると提示し、A型テアル文の成立に必要とする意味的・機能的制約として、(5) のように述べている。

(5) 「Xが～てある」構文に課される意味的・機能的制約

「～てある」構文は、動詞が表わす意図的行為が、過去において誰かによって何らかの目的でなされたことが話し手(疑問文の場合は聞き手)に明らかで、その行為に起因する状態が発話時において話し手にとって有意義であることを主張する表現である。

(ibid.: 18)

言い換えれば、A型テアル文の成立には、可視性という制限がない。従って、裴氏が提唱した「Cタイプ」は、ラレテアル文の特有なものではなく、テアル文に対応するものであることが明らかになる。従って、ラレテアル文の意味特徴はA型テアル文に一致し、A型テアル文の一種であると言っても差し支えない。

しかしながら、ラレテアル文は、テアル文の一種であるという考え方には、より一層検討すべきところがある。それは、テアル文においては、動作主が構文に出現しないのに対し、ラレテアル文は「に」などの表現により、動作主を明示することが可能である。

(6) イノスは、四人のジンを後に従え、軍団兵たちに警護されてある建物に入ると、くすんだ色の階段を登っていき、とある部屋へ向かった。

(LBi9_00208 BCCWJ)

また、志波 (2012) を参照すると、裴 (2018) が提案した三つのタイプは、タイプAは存在様態型に対応し、タイプBとタイプCは、抽象存在様態型に対応す

る。その観点からみると、ラレテアル文は受身文に所属すると認めるほうがより妥当であろう。しかし、その考え方にも、問題点がある。(7)を参照されたい。

(7) a、この本尊である薬師如来は、そもそも光明皇后眼病平癒祈願のためにと、ここの尼僧は説明してくれたと記憶するが、それで特に眼が大きく鋭く作られてあるのかと思う。(王莉2011: 7)

b、このような過程の萌芽が、貨幣—商品—貨幣—……—流動体—結晶体—流動体—……の変態が、貨幣—商品—貨幣—……—流動体—結晶体—流動体—……の変態のうちに、すでに完全に準備されてある。

(LBq1_00011 BCCWJ)

c、彼は巨大な図体を持ち黒い千貫の重量を持つ彼の身体の各部はことごとく測定されており、彼の導管と車輪と無数のねじとは限なく磨かれてある。(LBi1_00017 BCCWJ)

(7) は、いずれも「…が…られてある」という文型である。(7a) では、ラレテアル文は「ために」と共起し、「薬師如来像を作る」という事件の動作主の意志を前面化する。また(7b) と(7c) は、いずれも参照時の前にある目的を持って行われた動作の効力が今でも有効であるという意味があり、つまり「前もって準備」という機能を担っている。志波氏が提案した存在型受身文は、行為者を想定することはできないため、(7a) で示されたラレテアル文は、受身文として捉えることができない。そして、受身文では、「前もって準備」を表す機能がなく、ラレテアル文を簡単に受身文に分類することができない。

以上のことを踏まえ、ラレテアル文は、テアル文の意味特徴を持ちながら、受身文、つまりラレテイル文の構文特徴を持っているということが明らかである。ラレテアル文はテアル文あるいはラレテイル文の一種という考え方より、むしろラレテアル文をテアル文と受身文との合体であると考えるのがより妥当であろう。

三、ラレテアル文の分類

本節は、ラレテアル文の類型分類について論述する。前節で触れたように、ラ

レテアル文の機能に関しては、「眼前情景描写」と提案している人が多いが、褓(2018)は、可視性の制限によって、ラレテアル文を三つに分類している。また、吉田(2012)では、ラレテアル文を直接受身文のテアル構文と捉え、ラレテアル文の現れ方を調査している。吉田氏は、ラレテアル文は、現存文⁽²⁾になることができるが、作成動詞と書記動詞がラレテアル文に前接するとやや不自然になり、その理由について、作成動詞が表す物事には、何段階も動作の積み重ねがあるため、その過程性がラレテアル文を不自然に感じさせると提案しているが、本稿の調査においては、ラレテアル文には、作成動詞が述語になる事例が多く発見された。例(8)を見よう。

- (8) a、四方ほどの部屋にはムシロが敷かれ、正面右には赤い布で覆われた「神の座(アーサナ)」がつくられてあった。(LB1_00036 BCCWCJ)
- b、しかし南国のこととて太い竹に恵まれ、色々のものが作られてあります。(LB07_00049 BCCWCJ)
- c、三景園は、日本三景を模して造られてある。(OY11_05380 BCCWCJ)
- d、その壁にも、例の覗き穴が巧妙に作られてありました。(PB49_00375 BCCWCJ)
- e、このコルの西黒沢寄りの腹に、憬雪小屋というちっぽけな避難小屋が建てられてある。(LBt7_00062 BCCWCJ)

また、吉田氏は、ラレテアル文は、状態存続動詞と共起する場合は、意図達成文⁽³⁾になり得ると述べている。(9)を見よう。

- (9) a、松山藩士の伝統そのままだが虚子に継がれてあると思ったのか…
 - b、与えられてあるものの中に啓示されている自然の心
- (吉田2012: 151)

(2) 吉田(2012)が使う用語である。具体的にいうと、動作結果存続を表すテアル文を「現存文」と呼ぶ。

(3) 吉田(2012)が使う用語である。具体的にいうと、「準備」を表すテアル文を「意図達成文」と呼ぶ。

吉田氏は、(9)で示されたラレテアル文は、「伝統が(虚子の家に継がれた形で)存在する」「(与えられた形で)存在する」と言い換え可能であると述べている。つまり、それらの文は、対象の存在性が誇張されるラレテアル文である。しかし、吉田氏の解釈には、不足なところがある。その点については、次節の討論に委ねる。吉田氏は、もう一つの解釈を提案している。それは、こうした表現は古風な言い方あるいは方言的な表現という考え方である。

以上のことを踏まえ、本稿では、ラレテアル文の意味を基準に、受身文に近いラレテアル文を存在文と、そしてテアル文に近いラレテアル文を準備文と呼ぶことにし、ラレテアル文を検討しようと思っている。

四、ラレテアル文とラレテイル文、テアル文

本節は、ラレテアル文とラレテイル文、そしてテアル文との関係を究明したい。

前節で述べたように、ラレテアル文は、受身文とテアル文の特徴を兼有するので、存在を表す場合も、動作主の存在を不問に付すラレテアル文もあれば、動作主の存在を前面化するラレテアル文もある。ここでは、前者を単純存在文と呼び、後者を動作主前面化存在文と呼ぶことにする。

ラレテアル文は単純存在を表す場合、物事の存在場所を「ニ」によって提示され、ある動作によって、位置の変化をうける対象語はある場所に存在することを表す。そのようなラレテアル文は、動作主の存在が認められるが、その動作主を必要とせず、単に動作主の意図的行為によって変化された結果がある場所に存在することを表す。その場合、ラレテアル文は、ラレテイル文とテアル文との置き換えが可能である。その根拠として、物事の存在を表す文において、ラレテイル文、ラレテアル文そしてテアル文が同一文脈において混用することができる。(10)を参照されたい。(10a)では、テアル文とラレテアル文、(10b)では、テイル文とラレテアル文が置き換えられる。

- (10) a、壁に粗末なホール紙製の小さな仏壇がつくってあって、線香とお燈明の
ロウソクがいつも捧げられてある。仏教徒としての彼らの信仰は篤い。

(70B ベト 1965_00602 SHC)

- b、ストーブといえは、鉄板の上に金網が載っており、厚く切ったサツマ

芋が五、六切れ炙られてあった。

(于康 2006 : 8)

単純存在文においては、ラレテアル文とラレテイル文は、いずれも外部の働きかけによって変化した客体の存在状態を表すことができるが、テアル文はできない。さらに、その外部の力が自然現象の場合では、ラレテアル文は不適格である。

- (11) a、旗が風に吹かれている。
b、*旗が風に吹かれてある。
c、*旗が風に吹いてある。

(作例)

また、目の前の自然情景、つまり単なる状態を表す場合は、ラレテイル文は自然に使われるのに対し、ラレテアル文、テアル文は不可能である。

- (12) a、山に囲まれている。
b、*山に囲んである。
c、*山に囲まれてある。

(作例)

しかしながら、本稿の調査においては、単なる状態を表すラレテアル文を 2 例発見した。(13) を見よう。

- (13) a、ハルシュタット湖は、ザルツブルグ市とグラーツ市とを結ぶ線上、ザルツブルグ市から東南約五十 km、高い山にかこまれてあるのです。

(LBa4_00002 BCCWJ)

- b、近所に、僕の借家より立派な廃屋村が森に囲まれてあったよ。そこから海が見下ろせたんだ。

(LBk2_0007 BCCWJ)

この二つの文は、いずれも何の外部の働きかけを受けず、単なる状態を表す。その用例に対し、前節で触れた吉田 (2012) が提案した二つの考え方によって解釈してみよう。まず、仮説 1 は、(13) のような表現は作者の方言的表現、あるいは

は古風な書き方である。本研究の調査では、(13)に類義した表現が見られず、確かに作者の特別な言い方と捉えることができる。

そして、仮説2は、(13)のようなラレテアル文の文構造は「動詞の受動形+テアル」ならぬ、「動詞の受動形のテ形+本動詞ある」である。吉田氏の提案によって、(13)は、「ハルミュタット湖は、高い山に囲まれており、そしてその状態でザルツブルグ市とグラーツ市とを結ぶ線上にある」と「廃屋村が森に囲まれており、そしてその状態で近所にある」という二つの表現に言い換え可能である。しかし、仮説2によると、(11b)も「旗が風に吹かれて、その状態でそこにある」という言い方に置き換えられ、つまり「旗が風に吹かれてある」という納得できない文は自然な表現として捉えることになる。従って、吉田氏の提案には、問題点があることが明らかになる。ラレテアル文を「動詞の受動形のテ形+ある」という考え方はより一層検討する必要がある。

権(2013)では、テアル文は意志動詞しか共起できず、そしてラレテアル文はテアル文の一種であるので、ラレテアル文は無意志動詞と共起できないと提案されている。権氏の考え方によって、(13)は現代日本語のラレテアル文の正しい使い方ではないため、誤用表現あるいは方言表現であると言っても差し支えない。しかし、本調査では、ラレテアル文の動詞として、無意志動詞の使用が見られる。

(14) 千九百七十年前後の小説雑誌は、東海道新幹線の一つの車両に一、二冊は置き忘れられてあるといわれたぐらいいく売っていた。

(PB19_00034 BCCWJ)

齋藤(2010)では、A型テアル文の成立条件について提案している。齋藤氏によれば、テアル文の中に、「畳の上に彼女聴診器が置き忘れてある」というよう無意識表現があるため、テアル文成立には、「意志性」の有無が問題とならず、話し手が結果から人によって動作が行われたという推論のやさしさを求めている。齋藤氏の考え方をラレテアル文に転用すると、(13)が不適格文であることが説明できる。つまり、「森に囲まれてある」や「山に囲まれてある」という事象から、人の動作が推論できないので、ラレテアル文として不適格文である。つまり、ラレテアル文は、受身文とテアル文の合体でありながら、テアル文との距離が近いこ

とが明らかである。

一方で、動作主前面化存在文では、ラレテアル文とテアル文は、たとえば、「ために」などの動作主の意志を表す表現と共起できるが、ラレテイル文は、そのような表現と共起できない。

- (7) a、この本尊である薬師如来は、そもそも光明皇后眼病平癒祈願のために
と、ここの尼僧は説明してくれたと記憶するが、それで特に眼が大きく鋭く作られてあるのかと思う。(再掲)

こうした場合、ラレテアル文はラレテイル文と置き換えることができない。また、テアル文とラレテアル文については、前述したように、ラレテアル文は動作主を明示することができるが、テアル文には動詞主の出現が許されていない。

- (6) イノスは、四人のジンを後に従え、軍団兵たちに警護されてある建物に入ると、くすんだ色の階段を登っていき、とある部屋へ向かった。(再掲)

さらに、ラレテアル文は、「前もって準備」というテアル文の機能を持っており、ラレテイル文には、そのような機能がない。ラレテアル文は、「前もって準備」を表すことができる。テアル文のように自動詞と共起し、「前もって準備」を表すことができない。

- (16) a、昨日は十分寝てあるので、今日の試験は大丈夫だ。

b、*昨日は十分寝られてあるので、今日の試験は大丈夫だ。

(作例)

五、まとめと今後の課題

本稿は、ラレテアル文の位置付け、ラレテアル文の分類、そしてラレテアル文とラレテイル文とテアル文との関係を考察した。結論として、以下の結果が得られた。

まず、ラレテアル文は、テアル文とラレテイル文の特徴を兼有するため、テア

ル文とラレテアル文との合体であるが、テアル文との距離に近い。

また、ラレテアル文の分類については、ラレテアル文は、ラレテイル文に近い存在文と、テアル文に近い準備文に二分することができる。存在文は、さらに眼前状況の客観描写する単純存在文と動作主前面化存在文に再分類できる。単純存在文の場合、ラレテアル文はテアル文とラレテイル文との置き換えが可能であるが、ラレテアル文は、テアル文と異なり、その構文で動作主を提示することができる。また、ラレテイル文に比べ、ラレテアル文は、動作主の意志を前面化することができる。

さらに、準備文においては、ラレテイル文は、「前もって準備」という機能が無い。ラレテアル文は、他動詞としか共起できないに対し、テアル文は自動詞と共起し準備を表すことができる。

斐 (2018: 14) は、「[受身動詞+テアル] 構文は対象名詞のみが主語として用いられるため、全てが受動構文を取っている」と述べている。ただし、本稿の調査においては、B型テアル文の構文特徴をもっている表現、つまり、対象格をヲ格で構文が3例見られた。(17)を見よう。

- (17) a、それで、実は改革工程表の中に特別検査を実施するということを書かれてありますが、ちょっとこれは金融担当大臣にお聞きしたいんですが (中略) (OM65_00007 BCCWJ)
- b、あんなにたくさんのひとたちにゆりを配り宥されてある私の友たちよ。 (OV2X_00083 BCCWJ)
- c、丸められた便箋には「君は、君は、君は…」とだけ、その一言だけを何度度も何度も書き潰されてありました。あの時、あなたの心に触れたように、私は涙が止まりませんでした。 (PB19_00302 BCCWJ)

(17a) は国会会議録に収録された語例であり、(17b) は詩の一節であり、どちらも特別な文脈に使われる表現で、特別なニュアンスがあるかもしれない。また(17c) は、話し言葉である。例文の数が少ないため、現段階では何も言えないが、このような構文は、益岡 (1987) が提唱しているB型とはどのような関係があるかを検討する必要があり、この問題は今後の課題として残されている。

参考文献

- 寺村秀夫. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』. 東京: くろしお出版, 1984。
- 野村雅昭. 「近代語における已然態の表現について」. 『論集日本語研究15現代語』, 1983 [1969]。
- 益岡隆志. 『命題の文法』. 東京: くろしお出版, 1987。
- 于康. 「日本語の存在構文とその存在構文からみた動詞の意味と構文の意味とのかかわり」. 『国文学攷 中世文学・日本語学特集号』, 192・193, 2006。
- 赵福泉. 『日语语法疑难辨析』. 上海: 上海外语教育出版社, 2007。
- 高倉裕. 「「られてある」についての一考察」. Korean Journal of Japanese Language and Literature, 61, 2014。
- 裴銀貞. 「結果を表す「受動動詞+テアル」構文の出現様相の分析」. 『日本近代学研究』, 60, 2018。
- 志波彩子. 「4つのテキストにおける受身文タイプの分布」. 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』, 9, 2012。
- 権勝林. 「ラレテアル文の成立条件と構文的意味」. 『日本言語文化』, 25, 2013。
- Martin, Samuel. A Reference Grammar of Japanese. New Haven: Yale University Press, 1975。
- 尹鎬淑. 「近代語の「られてある」(已然態)について—近代の小説を中心に—」. 『広島大学教育学部紀要』, 44, 1995。
- 高見健一・久野暲. 『日本語構文の意味と機能を探る』. 東京: くろしお出版, 2014。
- 王莉. 「結果相の「ラレテアル文」の特徴とアспект機能」: [硕士论文]. 西安外国語大学, 2011。
- 吉田妙子. 『日本語動詞テ形のアスベスト』. 京都: 晃洋書房, 2012。
- 齋藤茂. 「テアル構文と受動表現(ラレテイル)との使い分け—結果を基に動作が行われたと推論することによる制約—」『麗澤大学紀要』, 90, 2010。

使用コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>
昭和・平成書き言葉コーパス (SHC)
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/SHC/search>